

# 「日本3.0」

Vol.12

## 日本を襲う 「引きずり下ろしデモクラシー」

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

1990年代半ば、インターネットが日本に普及し始めたとき、ネットは自由の象徴でした。しかし今日、フェイクニュースの問題が象徴するように、ネットは自由の敵にもなっています。2009年、ベストセラー『ウェブ進化論』の著者である梅田望夫氏が「日本のウェブは残念」とインタビュウで発言し、炎上したことがあります。梅田氏は、米国では、最先端・最高峰の知がオープン化されるツールとして機能したネットが、日本では、質の

低いコメントが飛び交う場になってしまったことへの無念を語ったのです。「素晴らしい能力の増幅器たるネットが、サブカルチャー領域以外ではほとんど使わない、“上の人”が隠れて表に出てこない、という日本の現実に対して残念だという思いはあります」2017年の今になっても、かつて梅田さんが指摘した課題はピピッドなままです。今なお、日本のウェブは残念なのです。ではなぜ、今なお日本のウェブは残念なのでしょうか。それはネット初期から続くネットの問題をまだ解決できていないからです。今なお、日本のウェブ上には、質の高くない言論空間はほとんどできていません。日本のウェブ空間は、当初から匿名がスタンダードであるため、「旅の恥はかき捨て」がまかり通ります。日本人は実名ではなかなか本音を吐露しませんが、匿名であれば本音で話しやすい。ただし、本音とは得てして醜く、自分勝手なものです。

今のウェブは影響力はますます高めているものの、そこに一流の知はなく、嫉妬が満ち溢れた空間になっています。いわば、現代版の「巨大なムラ」です。そこでもっとも嫌われるのは、権威であり、エリートであり、偉そうなことを言うリーダーです。社会学者の竹内洋・京都大学名誉教授は、現代を「引きずり下ろしデモクラシー」の時代と言います。「今の下克上は、何かに対峙しているわけではなく、ただ単にエリートや既得権益層を引きずり下ろすことが目的になってしまっている。改革といながら、引きずり下ろす衝動のほうに前面に出てきている。改革しても、また、改革したその人間を引きずり下ろす。だから、“引きずり下ろしデモクラシー”みたいなものです」私自身、ウェブメディアに携わる人間として、いい言論空間づくりのために奮闘するつもりですが、今の状況は簡単には変わらないでしょう。



### Profile

NewsPicks 編集長

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。リニューアルから4カ月で同サイトをビジネス誌系サイトNo.1に導く。2014年7月から経済ニュースサイト「NewsPicks」の編集長を務める。著書に「米国製エリートは本当にすごいのか?」「5年後、メディアは稼げるか」がある